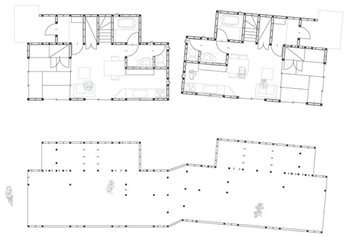
木軸の森、水の繊維

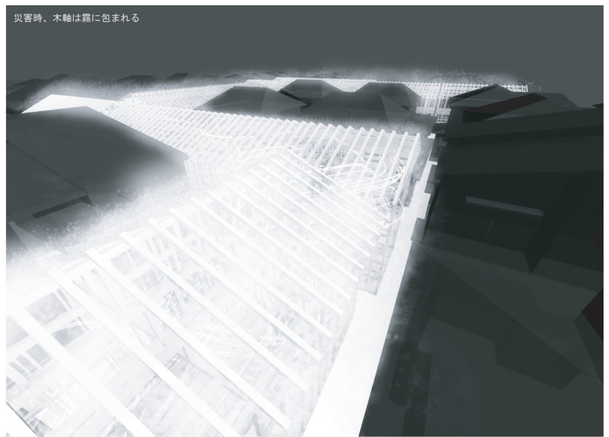
空間に満たされる光と風

家は変容し、線に彩られた道へと転生する



plan 1/200

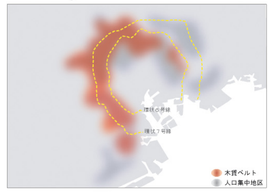
東京の環状６号沿いに広がる「木賃ベルト」地帯では近い将来大地震が東京を襲うかもしれないと危惧される中、防災対策が急務である。木賃ベルトは一般に防災上危険で低質な高密居住環境として認識されている反面、その外部空間はタイトなスケールで居住者のものが溢れ出し、親密なコミュニティーと結びついた、どこかノスタルジックな情緒を私たちの中に呼び起こす。提案の舞台である中野区南台地区は、まさにそのような２面性を持つ地区である。これまでの居住環境整備の手法は道路拡幅、高層化、公園整備という紋切り型であり、基本的にスクラップを前提としている。物質としての木造住宅、街区の空間の枠組みやコミュニティーなど、それは非常に多くのものをまちの記憶と共に消去してしまう。街区の空間性や記憶を継承しながら如何に居住環境としての機能を高めるのか？―そこにはスクラップの思考とは対極にある、モノの転生を起点とする防災対策、居住環境改善の手法があってよいはずである。この提案では、木密地帯をこれまで支えてきた木造住宅のフレームに着目する。老朽化した家屋を結んで街区を縫う線分を切り取り、その軸組みの機能と意味を転化させ、防火帯と線状のパブリックスペースとして転生させる。転生した軸組みは光と風を狭隘な街区に差込み、フレームの中を錯綜する水の管が火災時には噴霧的に水幕を作って防火線を形成する。軸組みに包まれた線状の水は人々の活動の場を流動的に縁取っていく。密度を構成していたものが空隙を与え、延焼材だったものが防火帯となる。転生は空間と記憶の継承と共に、逆説を生む。木密地帯の環境をいきいきとした姿で継承していくための鍵はポジティブな逆説の中にあると私たちは思う。



ひとつのモノを残すということは、たくさんのモノを残すということである

モノの意味が変わるということは、新しい価値が生まれるということである

analysis



①. 木賃ベルト

東京には円環状に人口密集地帯があるが、その中に「木賃ベルト」と呼ばれる一帯がある。戦後の急激なスプロール期に、環状６号と７号線にはさまれた地域に小粒の木造賃貸住宅が密集したエリアができあがった。木造アパートは鉄骨造のアパートに姿を一部変えてはきたものの、依然として「木賃ベルト」の中には古いストックとしてずっと残ってきた木賃アパートや、木造住宅が連綿と続いている。

オープンスペースの面積が外国の主要都市と比較して際立って少ない東京の中でも木賃ベルトの公園面積は少なく、とりわけ木造の過密による防災面での脆弱さが危惧を招いている。

②. 重点整備地区

東京には近い将来関東大震災クラスの大地震が再び訪れるのではないかという危惧がある。大きな災害が生じた際、木賃ベルト地帯では広い範囲の火災の拡張、過密の中での建物の倒壊による避難経路の遮断などによって重大な被害が生じる可能性が高い。木賃ベルトの中に、東京都は全部で１１の重点整備地域を定めて道路整備、建物の不燃化などの事業を実施している。これら重点整備地域は、とにかく迅速に居住環境の改善が必要とされている場所である。その中の一つに中野南台地区がある。

③. 中野区南台２丁目

「木造密集地区」というと、東京には私たちがノスタルジックな情緒と共に思い描くような、いくつかの地名がある。根津、谷中、月島・・・小説の舞台になったり、半ば観光地化したテーマパーク的な場所になっているところは木造密集地帯としての存在価値を認められ、環境としての評価を得ているように思える。場所としての強いイメージを有しているとも言える。

一方、木賃ベルトを構成する地区の中には、同じ木造密集地帯といっても、これといって強い土地のイメージを持たない、言わば「無名の」空間も存在する。このような場所は空間の質や密度に注目されること無く、防災面などの機能的、数学的な指標で評価され、改造事業の対象となる。中野区南台２丁目はまさにそのような「無名の場所」である。しかし、入り組んだタイトなスケールの路地と、住民の生活が溢れ出したその空間は、やはり密度の濃い親密さで私たちを包み込む。

東京に広く横たわっている既存の木造密集地域一大半が「無名のもの」ー私たちはどう関わっていくのだろうか？その方向性を問い直してみることは重要なことである。一つの無名の場所のケーススタディとして、南台地区を位置付けたい。

④. 現行のオペレーション

木賃ベルトで行われてきたオペレーションは、建物を取り壊して不燃建築物に建替える、または街区内の道路を拡幅し、延焼防止や避難機能を高める。この方法は基本的にそれまであった木造住宅を壊すことを前提としている。物質としての木造住宅の消去にはとどまらず、地区の中に醸成されていた空間の密度や人のつながり、場所の記憶も共にスクラップされる。開発地や道路予定地として宙吊りになった空き地が街区の中に散在して、まちが歯抜け状態のまま長期間がすぎている。

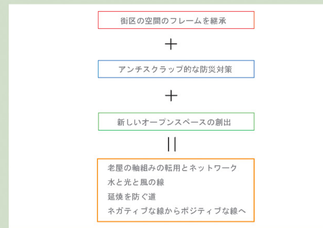
木賃ベルトが居住環境改善を必要としていることは間違いない。しかし、現行のオペレーションはまちにとって非常に大切なものを度外視している。

concept

①. 敷地写真：繊細な光と影

現在の南台２丁目の姿である。この木造密集地域が小さな、そして繊細な要素が集合して構成されているのが分かる。光と影が細かく複雑に編みこまれた空間である。

「生命の保証」という避けられぬ命題があるにせよ、ここを現行のオペレーションのようにマッスとヴォイドに完全に分けられた空間に置き換えるということは日常の生活、空間の記憶を破壊することに他ならない。

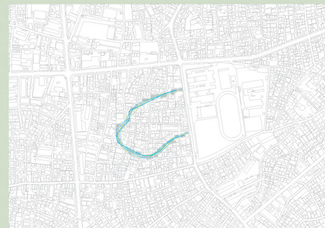


②. 提案：転生と継承

我々の提案は、木造密集地域の空間性を維持した上での対災害地域への変換である。

木造住居の軸組だけを残す。老朽化したものには補強を施す。床であった所に透明なプレートを嵌め込む。この行為を繰り返し、この場に有機的なラインによる木軸の道を表出させる。この細い空間に水の線を挿入する。この道を延焼遮断帯として機能させるための霧を作り出す繊細な水の集合である。この提案によってひとつの家を成立させていた木軸が、地域生活を成り立たせる構造体へと転生することになる。

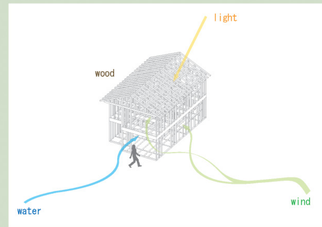
そして、このような木造密集地域がもつ単なるノスタルジーではない、線状の光と影による美しさが顕在化することになる。



③. 配置図：ライフライン

様々な要素が織り成す有機的な線は、南台地区の避難公園に指定されている東大付属高校へと開いている。災害時、この空間が延焼遮断帯としての機能を果たす時には、ここが地域住民の避難路として利用されることになる。

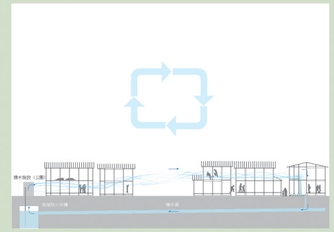
日常生活において多くの彩りを添えるであろうこの空間は、災害時には生命を守る霧に包まれた道になるのである。



④. イメージ・アクソメ　1：木・水・光・風

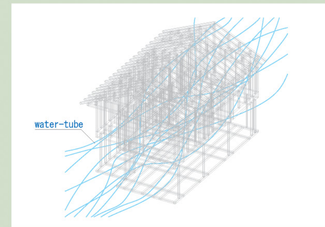
木軸の線状空間は、水・風・人が通る道である。木造密集地域が持っていた繊細な空間性の継承であると共に、新たな自然の創出でもある。

この線によるだけの空間は、延焼遮断・避難路という防災に関する機能だけではなく、地域の様々な活動を許容する。
木造密集地域がもつインテリアとしての外部、コミュニティー・スペースとしての路地の継承、そして更新でもあるのである。



⑤. システム図：水の循環

木造の軸組みの中を錯綜する水は地域の防火水槽から揚水されてチューブに入り、ループを形成する。延長して管のループが作られることで防火水槽は容量を拡張し、人々が生活している空間の身近に入り込む。災害時の消化用水、また延焼遮断帯となる水幕が街区の中、人々の生活のより手近な部分に置かれることになる。水は軸組みの中の線状オープンスペースの空間と使い方に変化を与え、滝となって地中管を経由して防火水槽に戻される。今まで地下の防火水槽の中に眠っていたその存在が、この軸組みの帯の中でオブジェとして視覚化され、人々の生活空間と一体化する。

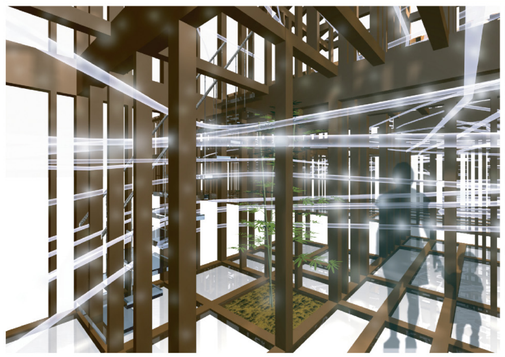


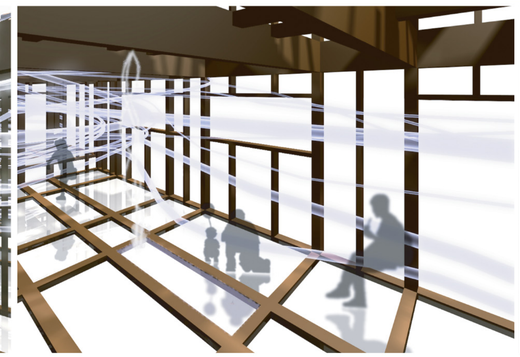
⑥. イメージ・アクソメ　2：意味の再構築

木軸に包まれた空間に、繊維のような水を挿入する。それはETFE素材によるチューブである。時としては集まり、周囲に対し緩やかな境界を作るかもしれない。

本来の意味を失った木軸の粗密によるリズムとこの水よって空間には様々な場が生まれる。これによって、軸組みにまで解体された家が、その意味さえも解体されることになる。

そして新たにこの空間は、最初から与えられているものではなく、それぞれ人が、その時々で獲得していく意味に満たされることになる。





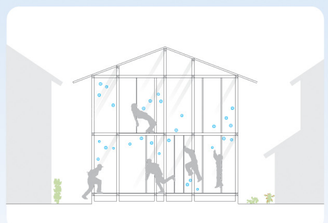
diagram

ある木造住宅がありました。まわりの木造の家も密集していて、どこかで火事があったら延焼してしまいそうです。
それでは壊してしまえばよいのでしょうか。でも、それでは折角の暖かい雰囲気が台無しです。
さて、どうしましょう？

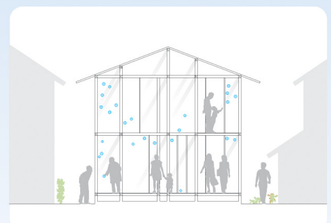
そこで、この家の生活を支えていた木造の軸組だけ残してみることにしました。
これなら場所の雰囲気を維持しつつ空間の密度を減らすことが出来そうです。
そして次に、木軸で包まれた中に繊細な線状の水を挿入することにしました。
こういうイエが帯のように連なれば、風と光と水の通る気持ちのいい木の道が出来ることになります。

ここで提案した木・水・光・風による道は、延焼から生活を守るという機能も備えます。
水の管は水を噴射することで、霧状の道をつくり出すことが出来ます。
火事の時、この霧の道は安全な避難経路となると共に延焼を遮断する役割も果たしてくれます。

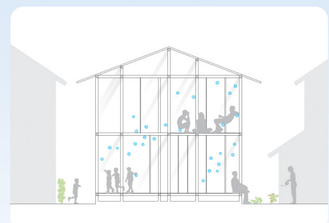
古い木造の家が、地域の生活を支えるライフラインに生まれ変わるのです。



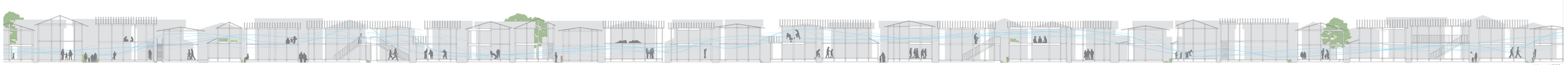
くねくねと走る水の管をつかってスポーツをしているかもしれない。
飛び越えてみたり、リンボーダンスしてみたり。



天気のいい日はみんながこの道を通るかもしれない。
綺麗な水の姿に喜ぶ子供や、水越しのキラキラした光に照らされた女性に一目惚れする人だっているのかも。



子供たちは待ち合わせ場所につかうかもしれない。
隣の家の花を眺めながら井戸端会議をしているかもしれない。
２階では、若き青春の悩みを語り合っているかもしれない。



section 1/300